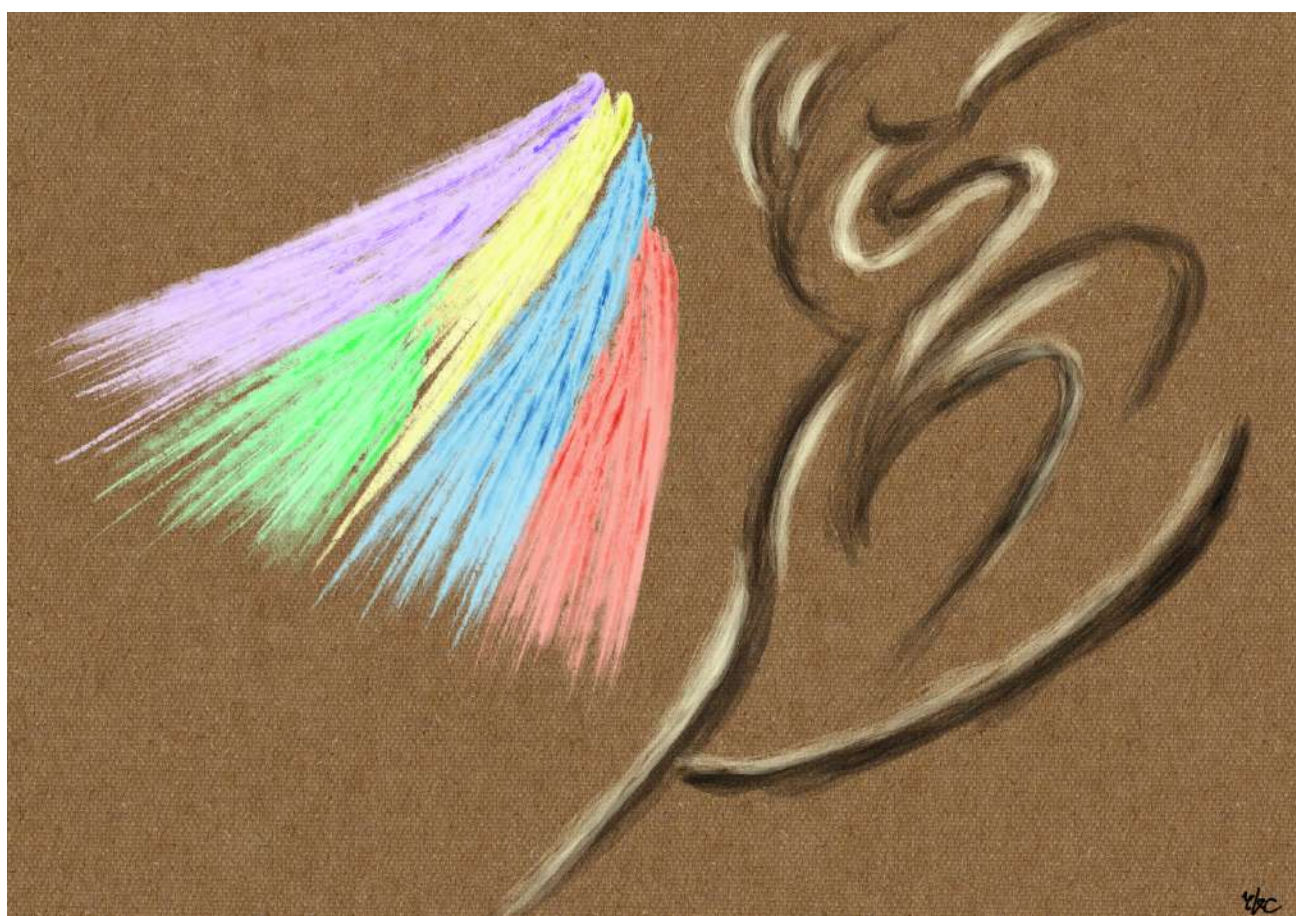

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 322

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



No.1558 虹鳥と宿木_A Rainbow Bird & a Host Plant

目次

- 6421. 本日の映画鑑賞より
- 6422. 今朝方の夢
- 6423. 8本ほど映画を見て
- 6424. 今朝方の夢をふと思い出して/本日見たその他の映画について
- 6425. 自己超出体験/オランダとフィンランドの健康保険
- 6426. 魔界に関する印象的な夢
- 6427. 創造を司る魔神/今朝方の夢の続き
- 6428. 「スノーデン事件」を取り上げた2つの作品を見て
- 6429. 本日の計画と今朝方の夢
- 6430. 本日の映画鑑賞より
- 6431. 「動く絵画」としての映画/今朝方の夢
- 6432. 穏やかな夕日を眺めながら
- 6433. 泡沫の如し宝のような流れとしての人生
- 6434. 流れる時間/意識の流れの形象化
- 6435. 今朝方の夢
- 6436. 『 कांग्रेस未来学会議(2013) 』を見て/今朝方の夢の続き
- 6437. 今朝方の夢
- 6438. 『 バニラスカイ(2001) 』『 666号室(1982) 』を見て
- 6439. 今日の予定と今朝方の夢
- 6440. 仮眠中の知覚体験/9本の映像作品を見て

時刻は午後7時半を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終えた。

静かな世界。暗闇に包まれた静かな世界がただありのままに佇んでいる。自己はそうした世界を見つめていて、世界と一体化している。また逆に、世界が自分と一体化しようとしてこちらに歩み寄っている。そして実際に合一を果たした。そのような感覚が今この瞬間にある。

今日は結局、合計で7本ほどの映画を見ていた。今日のテーマとしては、時空間のループとパラレルワールド、さらには二重スパイの映画をいくつか見て、その他には性愛関係の映画も見た。今日は映画だけを見ていたわけではもちろんなく、作曲実践もいつものように並行して行なっていて、創作と映画の鑑賞を交互に行き来する場合、無理のない範囲で1日に見れる映画の数は7本ぐらいだということがなんとなくわかった。おそらくあと1本見ても無理はないと思うが、今のところ毎日5-6本がちょうどよく、休日には7本見る事ができれば上出来かと思う。その程度あれば全く無理なく映画を見ていくことができる。

今日の映画鑑賞において考えさせられたこと、感じたことは数限りない。やはり映画を見ながらメモを取っていくと、そこから汲み取れることが多くなり、映画が自己認識と世界認識を拡張してくれることにつながる。今の自分が再度自己認識と世界認識を拡張させる方向に向かって突き進んでいる様は不思議に思えるが、そうした隠れた衝動があるらしく、それに純粋に従うのも悪くないだろう。きっとそれが自然なプロセスなのだ。

ここ最近見る映画の中で、やたらと「クモ」が登場しており、少し前の夢の中で蜘蛛の糸が登場していた。本日見た『プリデスティネーション(2014)』の中でもクモが出ていた。当然ながらどのようなクモが現れ、そのクモが何をするのかによって、それが象徴する意味は異なるのだと思われるが、この作品を見ながら、クモは糸を通じて何かに導いてくれる存在なのかもしれないと思った。

本作のタイトルは、「運命」ないしは「宿命」とでも翻訳できるだろう。クモが象徴していたのは、運命への導き、あるいは宿命によって導かれる人生を暗示していたのではないかと思われる。また、クモは糸を無数に張るという性質があり、それは何か決定論的な運命論とは全く逆に、無数の選択肢が

私たちの人生に存在するという可能世界の示唆でもあるように思えたのである。そのように考えてみると、クモというシンボルは本当に示唆に富む。

その他の作品においては、『月に囚われた男(2009)』を見ながら、クローンとオリジナルの区別の難しさと、両者が出会った時の存在の混乱について考えさせられた。それは今日15年ぶりに見た『オーロラの彼方へ(2000)』という作品のテーマである2つの異なる宇宙が出会う際の混乱と似た問題である。さらには、本日見た香港ノワールの最高峰と言われる『インファナル・アフェア 無間道(2002)』における二重スパイのアイデンティティの維持の問題とも関係しているように思える。本来出会ってはならない2つの存在が出会うこと、あるいはそれを内側に抱えることの困難さについて考えさせられる。

異質性と同質性について考えさせることを促す闇の世界が外に広がっている。フローニンゲン：
2020/11/21(土)20:03

6422. 今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えた。日曜日の朝が静かに始まり、静けさの中に今佇んでいる。

今日はどうやら雨は降らないようであり、晴れ間が顔を覗かせるようなので何よりだ。世界は今、コロナの第3波で再び不穏な雰囲気醸し出しているが、この街は穏やかさを保っている。

天気予報を見ると、来週末からはいよいよ最低気温が1度になるとのことである。それは冬本番が始まることを物語っている。考えてみれば、もうすぐ12月なのだから、当たり前といえば当たり前かもしれない。ちょうど昨日から、書斎のヒーターをつけるようになり、確かに寒くなってきたことは確かである。

今朝方もまた夢を見ていた。深夜に1度目が覚め、そこからまた2度寝して、再び夢の世界に戻って行った。最初に目が覚めた時までに見ていた夢は、もうほとんど記憶に残っていない。感覚として、中立的な感情のまま進行していくような夢だったように思う。見知らぬ女性が登場しており、その女性と会話をしていたことを覚えている。1度目が覚めて再び参入した夢の世界においては、少しばかり感情的な揺さぶりがあったように思う。そこではオランダ人の見知らぬ女性と話をしており、彼女

との会話が感情を揺さぶったのではなく、彼女との会話が終わった後、どこかに向かっている最中、あるいはどこかに到着してからの出来事に感情を揺さぶられたことを覚えている。

昨夜の夢は総じて形を把握しにくいものだった。昨夜は映画を7本見て、就寝ギリギリまで音声ファイルを作成しており、そうしたことが夢の世界に何かしらの影響を与えたのかもしれない。今日もまた積極的に映画を見ていきたい。映画への肯定的な渴望感に突き動かされる形で日々映画を見ている。1つ1つの作品から感じる事、学ぶことがたくさんあり、感覚の新たなドアが開かれていることを実感する。今日もまた未知の世界へ誘ってくれる映画を楽しもうと思う。今日はどのような作品との出会いがあるだろうか。フローニンゲン:2020/11/22(日)07:30

6423. 8本ほど映画を見て

時刻は午後7時半を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終え、今、ゆっくりと今日の充実感を味わっている。振り返ってみると、今日は結局、合計で8本ほど映画を見た。昨日は7本見て、昨日の段階で、8本であれば無理のない範囲だと仮説を立てており、感覚としてまさにそれが正しいことが今日実証された。

映画を8本1日に見ても見過ぎたという感覚はなく、1つ1つの映画から学んだことや得られた感覚を十分に消化吸収することができる量だということがわかったのである。明日からは新たな週を迎え、オンラインミーティングが入っている日もあるので、そうした日には7本や8本映画を見るのが難しいこともあるだろうが、今のところ最大では8本までなら咀嚼可能な量だということを体験を通じて理解することができた。

今朝最初に見た映画は『unknown アンノウン(2006)』という作品であり、古びた倉庫に閉じ込められた全員が、目を覚ましてみると、ガスによって全員記憶喪失になっていたという面白い設定から物語が始まる。自分が誰かわからないという状態の中から、少しずつ記憶を取り戻していく形で物語が進行していき、鏡を見て記憶の一部を思い出すシーンが印象に残っている。鏡は映画ではよく出てくる物であり、鏡は自己の内側を映し出し、自分が何者なのかを思い出させてくれたり、内省する役割を果たすのだということが改めてわかる。

ある登場人物が、「記憶で本当の自分が決まるんじゃない」という言葉を述べていた。私たちは過去の記憶に縛られて生きている生き物だが、それが時に、あるいは往々にして現在の自分の限界を定めてしまっている。自らを縛る記憶から解放されることの大切さを思う。

現代社会で生活をしていると、隣人が一体何者なのかということは実はわかっていないことが多い。というよりも、ほとんど何もわかっていないというのが実情だろう。仮に何かわかっていたとしても、それが実は成り済ましや偽りの可能性があり、さらにはある真実の断片であるということを考えると、私たちは本当に近所に住む人間のことなどわかっていないのだ。それを実感させてくれること、かつそうした隣人への無知さがもたらす危険性について考えさせてくれる映画として、以前に黒沢清監督による『クリーピー 偽りの隣人(2016年)』を見て、今日は『グッド・ネイバー(2016)』と『隣人は静かに笑う(1998)』を見た。どちらも非常に興味深い作品だった。

私たちは、正体不明の隣人を信頼する形で生活を成り立たせている。しかし、そうした正体不明の人間が何をしでかすかはわからず、また仮に隣人を知ろうと思っても、結局ある個人は他人から知り得ない部分というものを必ず持ち合わせているのだ。前後するが、正体不明な人間が行う悪事に関しては『隣人は静かに笑う(1998)』という映画で描かれており、仮に隣人を知ろうと思っただけでも、結局重要なことは何もわからないということは『グッド・ネイバー(2016)』の中で見事に描かれている。

隣人を信頼しようと思っただけでもうまくいかず、信頼しようという努力がなければ隣人が何をしでかすかわからないという、信頼に関して八方塞がりな状態の中で現代人は生きているということが見えてくる。ここからますます信頼が揺らいでくると、私たちの社会はどのようになってしまうのだろうかと危惧する。

その他にも今日はまだまだ映画を見ていたが、もう1つだけ取り上げるとするならば、少し古いが『透明人間(1933)』という作品が印象に残っている。本作品は、第二次世界大戦前の古い映画だが、意外と見応えがあった。透明人間を作るというのは実験の副産物であったが、似たような危険性のある実験は今も世界各国で行われ続けているはずだ。そのようなことを思いながら、「透明人間」というのは、現代におけるアイデンティティを喪失した人間や、自らが誰かを定義することが難しい社会から阻害された人間たちを象徴しているのかもしれないと思った。また、自分が透明な存在に感

じられるというのは、猟奇的な殺人犯に時折見られる自己認識であることについても考えていた。フ
ローニンゲン:2020/11/22(日)19:57

6424. 今朝方の夢をふと思い出して/本日見たその他の映画について

ゆっくりと進行していく時間。そして、日々ゆっくりと着実に深まっていく自己。

時刻は午後8時に迫ってきている。この時間帯になって今朝方の夢の断片を思い出した。エレベーターに乗り込む夢の場面があったのをふと思い出したのである。その場には10人ぐらいの人たちがいて、その中には何人かの知人がいた。そして、著名なある日本人の投資家もいた。

エレベーターは程なくして下から到着し、私たちはそこから下に向かった。エレベーターに乗り込む際に、75kgを超えた体重の人たちが多くいることに気づき、自分が乗ると重量オーバーの警報ブザーがなるのではないかと思った。そこで私は、次のエレベーターを待つことにして、知人を含めて、6人ぐらいを先に行かせた。するとすぐに次のエレベーターがやってきて、残りの人たちと一緒にエレベーターに乗り込んだ。私たちは全員、1階に向かいたかったので、1階の押しボタンを私が押した。

すると、エレベーターのドアが閉まり、下に向かって動き出した。ふとエレベーターの重量制限の表示を見ると、先ほどの私の判断は正しかったと思った。さっきのエレベーターに乗った人たちの体重を合計し、そこに自分の体重を加えると、やはりオーバーになってしまうことがわかったのである。私はその計算の正しさに思わず笑ってしまい、笑みが溢れたところで夢の場面が変わった。そのような場面があったことを思い出す。

夕方に見た映画の中に『ギヴァー 記憶を注ぐ者(2014)』という作品がある。誰も過去の記憶を持つことなく、全てが管理された社会という設定は、今後の人間社会を思わせる。物語の中の社会において、全ての差異を抹消し、それによって一見すると、争いも差別もなく人々が幸せそうに暮らしているが、それは欺瞞であり、私たちの世界は差異があるからこそ美しく、それによって進化していくという側面もあることを改めて考えさせられる。

この作品は、記憶を受け継いでいくことの大切さとその困難さについても考えを巡らせる契機を与えてくれ、人々は協働して記憶を受け継いでいく必要があることを実感させてくれる。記憶は人を苦しめる力がありながらも、同時に生きる力を与えてくれるものでもある。記憶の持つそうした両義性を改めて思う。

主人公に記憶を引き渡す役割を果たした人物が、「信念とは彼方を見ることだ。彼方を見ることは、風を感じることに似ている」という言葉を述べていた。この言葉は詩的な表現としてとても印象に残っている。この言葉が意味すること。それを自分なりに考えている。

今日は洋画を6本、邦画を2本見ていたのだが、つい先ほどまで見ていたのは邦画の『空中庭園(2005)』という作品だ。この作品では、「家族間では秘密をつくらない」というルールが定められていて、実際にはそれぞれに秘密を抱えている家族が崩壊と再生を体験する姿を描いている。息子の家庭教師として家族にやってきたミーナという存在は、家族を混乱に陥れる異質な存在としてのシンボルだったのだろう。別の表現で言えば、境界を超えさせ、非日常に導く存在としての役割が付与されていたことが見えてくる。

物語の冒頭で、なんでも包み隠さずに家族全員が話をしている場面が描かれていて、その会話の異様さがとても新鮮な感じがした。逆に言えば、真実を打ち明けることが異様に思えるほどに現代の家族は欺瞞で満ちていることを示しているように思えたのである。あるいはそもそも、人は必ず秘密を持つ存在であるからこそ、なんでも明らかに語ることが異様に映ったのかもしれない。現代の家族だけではなく、結局人間は、そもそも欺瞞に満ちた存在なのかもしれない。フローニンゲン：2020/11/22(日)20:15

6425. 自己超出体験/オランダとフィンランドの健康保険

時刻は午前6時半を迎えた。今日から新たな週を迎え、月曜日の朝は昨日の朝と同様に静けさで包まれている。この時間帯はまだ真っ暗であり、あと1時間ほどしてようやく辺りが明るくなってくる。幸いにも今日は快晴の予報が出ていて、朝の時間帯は特に雲がないようなので、朝日を拝めることが楽しみだ。今夜の最低気温は3度まで下がり、いよいよ今週末からは最低気温が1度まで下がる。氷点下を迎えるのも間も無くのことかと思う。

これから冬本番が始まる。しかも長い冬である。本格的な冬の始まりを前にして、昨夜は就寝前に、自己超出体験があった。これはふとしたときに訪れるものである。自己が完全に澄み渡るような形で内省力が発揮され、ベッドの上に横たわっている自分がまるで他人であるかのように、自己を越えていき、完全に自己を客体物として眺めているような体験である。この体験が起きるときには決まって、自己のまだ見ぬ側面が開示されるような気づきが伴う。そしてその気づきは、人生に関する貴重な洞察となっていく。それはある種の啓示体験である。

昨夜は、経済・金融、そして政治関係の映画を探していた。すると、経済・金融に関しては8本ほどまだ見ていない映画を見つけ、政治に関しては18本ほど見つけた。今日からはそれらを中心に映画を見ていくことにする。今日はオンラインミーティングが1件もないので、映画鑑賞と作曲実践に力を入れ、午後には少しばかり時間を取って音声ファイルを作成して行こうかと思う。

アメリカの保険制度は問題が山積みであることはよく知られていて、老後にアメリカに住むことの危険性について考えていた。そこからひるがえって。再度オランダやフィンランドの国民保健について調べていた。特に、外国人の保険がどうなっているのかが大切であり、その点について調べていた。確かにもう間も無くすれば欧州永住権を獲得することができ、オランダの市民権を得ることもできてしまうのだが、仮にオランダで市民権を得なかった場合に、保険がどうなるのかを調べてみた。

端的には、オランダには国民皆保険制度が存在し、すべての国民と長期滞在者には医療保険加入が義務付けられているため、保健に関しては何も問題がないことがわかった。居住ステータスが現在のものであっても、市民権を獲得しても大差はほとんどないということだ。ひよっとすると何かちょっとした差があるかもしれないが、昨日の調査ではそこまでわからなかった。いずれにせよ、少し注意が必要なのは、オランダはホームドクター制を採用しており、病院に行きたくても、かかりつけのホームドクターの承諾ないしは推薦がないと病院に行けないことだ。

突然の事故や病気などの緊急の場合には、おそらく緊急病院に行くことができるのだと思うが、それ以外の病気や怪我に関しては、1度ホームドクターを通さないと行けない。日本人の私からすると、この制度には慣れておらず、わざわざまずホームドクターのところに行くことは面倒に思うが、軽い病気や怪我ならホームドクターに治癒してもらい、病院は重い病気や怪我を治癒する場所というように棲み分けがなされているのは、諸々の観点で合理的と言えれば合理的なのかもしれない。

フィンランドにおいても国民皆保険制度が維持されており、市民であれば誰でも低額で公的医療機関を利用することができるとのことである。仮に外国人であってもフィンランドに1年以上住み続ければ、健康保険カードが発行され、市民と同様の医療サービスを受けることができるということを知った。公的医療機関としては、地区ごとに医療センターが整備されているらしいが、地区の医療センターは患者が殺到する傾向があるらしく、中流階級以上は、カネを払ってでも予約制で待ち時間の少ない私立病院を利用する傾向にあるらしい。保健の観点からも、いつか移住しようと考えているフィンランドは不便がなさそうである。フローニンゲン:2020/11/23(月)06:55

6426. 魔界に関する印象的な夢

時刻は午前7時を迎えようとしている。今、小鳥たちの鳴き声が辺りにこだまし始めた。新たな週を祝うような優しい鳴き声が聞こえてくる。日が昇るまでもう少し時間がある。この日記を書き留めたら、洗濯物を洗濯機に入れようと思う。

今朝方はいくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、巨大なボルダリングの壁を前にしていた。そこは日本でも外国でもなく、はたまた地球でもないような雰囲気を持っていて、別の惑星の中にポツンと用意されたボルダリングの施設のように思えた。それは大きな岩石のようにその場に佇んでいて、まさにロッククライミングをするにふさわしいような物体だった。日本人だけではなく、外国人もその場に数多くいて、各人が思い思いにその岩を登っていくことを楽しんでいて、

私の横には小中高時代の親友(NK)がいて、彼と話をしながらどこからどのように登っていくかを相談していた。すると、1人の見知らぬ細見なのだが筋骨隆々の日本人女性が現れ、身体を宙に浮かせながら壁に手をつけることなくコースを進んでいった。宙に浮いて体をひねりながら高速で回転し、笑いながらコースを進んでいく姿は不気味でもあり、圧巻でもあった。その場にいた人たちは、彼女がそのように進んでいく姿に釘付けになっていた。

すぐに彼女はどこかに消え、そこから親友と私は、まずは簡単なコースから攻略していくことにした。すると、そこに別の友人(HY)が現れた。彼がボルダリングよりも面白いものがあると教えてくれ、それはその岩の天辺にあるとのことだった。天辺まではエレベーターのような役割を果たす棒を伝

ていけばいいとのことであり、私は彼についていく形で天辺に行ってみることにした。天まで届きそうな巨大な棒にしがみ付くと、自動で体が上へ上へと上がっていき、程なくして天辺に到着した。

そこからの眺めは素晴らしいというよりも、あまりにも高い場所であったため、幾分恐怖感を覚えた。下がもうまるっきり見えないぐらいの高さだったのだ。岩の天辺でもいくつか競技が行われていて、網から下に落ちないように進んでいくものがあった。そして友人がこれから私と一緒に行きたいと行っていたのが、2人1組になって行う棒高跳びのような競技である。それは棒のバーを超えていくのではなく、棒を使って、どこまで遠くへ飛べるかを競うものだった。しかも棒は2回まで地面に着いてよかった。そのようなルールの競技を初めて行うため、どれくらい遠くまで行けるのか全く未知であった。私たちが挑戦する前に、サッカー日本代表のある選手のコンビが7mほど飛んでいて、それがそれまでの最高記録だった。

いざ私たちが助走をし、飛び出してみると、なんと21mを超える記録を出した。最初に棒を地面に着地させるときに、すでに7mを超えていて、9mぐらいだった。それであればそこから棒を使って地面を蹴り出して再度飛び出せば、かなりの記録が出せると友人と私は確信していた。結果として、それは世界記録すらも超えることになった。正直なところ、私たちはまだまだ遠くに行けたのだが、21mを超えると、辺りの雰囲気ガラリと変わった。それまでは楽園のような雰囲気だったのだが、そこから先は魔界のような雰囲気を発していた。

目の前には墓場が広がっていて、21mよりも先は魔界の入り口のように思えたのである。私たちは一度21mの地点で足を着けた。そこから先の墓場では、神や仏の力が働かないらしく、そこに何がいるのか、そしてこれから何が起こるのかわからない恐怖があった。しばらくそこに佇んでいると、恐怖以上に好奇心が芽生えてきて、私はその先の世界に進んで行こうと思った。

魔界の入り口には電信柱が1本立っていて、そこに悪魔がへばりつく形で住み着いているようだった。私はその電信柱に登っていき、へばりついている真っ黒な悪魔を電信柱から引き剥がし始めた。皮膚のようなものを引き剥がすごとに、それは地面に向かってパラパラと散っていき、1つ1つの断片が真っ黒なカラスに変わり、どこかに飛んで行った。悪魔は何も抵抗せず、むしろ電信柱から引き剥がしてもらおうことを望んでいるかのように無抵抗だった。全てを明け渡した悪魔を救出するか

のように、電信柱の付着物を全て剥ぎ取った瞬間に夢から覚めた。この夢はとても印象に残っている。

昨夜に自己超出体験があっただけに、意味深長な夢である。棒を使った競技で前人未到の記録を出した後、魔界の入り口に立つというのは、今の自分の生活と照らし合わせてみると、色々と考えられることがある。また、魔界に住んでいた悪魔が実は解放を望んでいて、それが解放されるということも大変に示唆に富む。自分の中にある魔界、さらには霊界の存在に対する認識が深まるにつれ、そして日々の探究と実践を積み重ねていけばいくほどに、魔界や霊界の奥深くに入っていくことに抵抗がなくなってきただけでなく、それらの世界すらも超えて行こうとする自己の芽生えを見る。

この夢は大変示唆に富んでいたもので、ここからまた考えを深めていきたい。夢から汲み取れることは本当に無数に存在している。そして、それらは自己の無限の可能性だと言い換えることができるだろう。フローニンゲン:2020/11/23(月)07:22

6427. 創造を司る魔神/今朝方の夢の続き

時刻は午前7時半を迎えようとしており、今ようやく空がダークブルーに変わり始めた。辺りが明るくなるまでに後30分は必要だろうか。ひょっとすると1時間ぐらい必要になるかもしれない。

先ほどまで、今朝方の夢について振り返っていた。特に魔界に関する夢が印象に残っていて、今もまだ魔界にいた時の感覚が強く残っている。こうした感覚はもはや自然言語で表現し切れるものではないので、絵や曲の形にしていこうと思った。魔界にいたときの感覚を絵にし、曲にしていこうと考えながら、過去の偉大な画家や作曲家において、魔界を見たことがある者たちについて考えを巡らせていた。おそらく彼らの作品から、魔界そのものへの洞察が得られるだけでなく、魔界で得られた気づきや体験、そしてそこで得られた感覚を絵や曲にしていこう際のヒントが得られるだろう。

魔界の中に存在している魔神との出会い。魔神は創造神でもあり、それとの邂逅は、きっとこれからの自分の創造活動に大きな影響を与えてくれるだろう。夢の中に出てきた悪魔はそうした魔神だったのかもしれない。

そう言えば、その他にも夢を見ていたことを思い出す。夢の中で私は、実際に通っていた中学校の体育館にいた。どうやらスポーツフェスティバルの一環として、これからフットサルの大会がクラス対抗で開かれるようだった。私のチームにはサッカーの経験者ばかりが揃っていて、正直なところ、試合をする前から自分たちのチームが優勝するであろうということが予想できた。

私たちのチームは、他のチームの視察がてら、第一試合の様子を眺めていた。試合を見る限り、やはり私たちのチームの実力が飛び抜けていることがわかったが、初戦は特に気を引き締めて行こうと話し合った。そこからスターティングメンバーを決めていくことになり、ある友人(KM)が、私と親友たちのグループからキーパーを選んで欲しいと言ってきた。

私たちの仲よしグループは6人で構成されていて、他のグループよりもメンバーが多く、そうしたことからそこから1人キーパーを選出してくれと彼はお願いをしてきたのだ。すると、ある優しい親友(NK)がキーパーを進んで買って出た。彼はフットサルがとても上手く、キーパーにするには惜しい存在だったのだが、まずは彼にキーパーをお願いすることにした。

試合開始の時刻が迫ってきたので、私の方からチームに作戦を伝えた。私の戦略は明確であり、オールコートゾーンプレスを試合開始早々に仕掛け、開始3分で方をつけるというものだった。試合開始直後から、前線から激しいプレスをかけ、そこで大量得点を奪うことによって、相手の戦意を喪失させることが目的だった。実際に試合開始のホイッスルが鳴り、試合が始まってみると、開始1分ほどで、もう大量得点を奪うことができしまい、相手は戦意を喪失しているようだった。逆にそれはとても味気なく、試合をつまらないものにしてしまったと思った。今朝方はそのような夢も見ていた。

フローニンゲン:2020/11/23(月)07:44

6428. 「スノーデン事件」を取り上げた2つの作品を見て

時刻は午後7時半を迎えた。静かな夜の世界が広がっている。朝の静けさ、そして夜の静けさ。振り返ってみれば、昼間もまた落ち着いた世界が広がっている。静けさの中で日々を過ごしていることの有り難さを身に滲みて思う。

今日は合計で6本ほど映画を見た。昨日は休日ということもあって、協働プロジェクトに関する仕事が多かったので合計で8本ほど映画を見ることができた。今日は少しばかり協働プロジェクトに関する

る仕事をしていたこともあり、流石に8本も映画を見ることはできなかったが、気がつけば6本ほど映画を見ていた。

今日は経済・金融関係、そして政治関係の映画を見ていた。経済・金融関係で言えば『ウォール街 (1987)』と『金融腐蝕列島 呪縛 (1999)』を見ていた。明日も両作品から派生した形でいくつか経済・金融関係の映画を見ていく。それらの作品に対する感想については、別のところで書き留めておくことになるかもしれない。

政治関係で言えば、『シチズンフォー スノーデンの暴露 (2014)』と『スノーデン (2016)』が傑作であった。特に前者のドキュメンタリーは素晴らしかった。世界はますます超管理社会に向かっているが、それにまつを掛ける重要な事件に「スノーデン事件」というものがある。これは元CIA職員のエドワード・スノーデンが、NSAが推し進めていたアメリカ国民の通信データを秘密裏かつ大々的に収集している事実を告発した大事件である。

2011年当時、アメリカは1秒間に200億件もの通信データを収集できる力を持っていた。おそらく今はさらに大量かつ精密なデータ収集ができるようになっていだろう。使っているパソコンや携帯などの電子端末によって、アメリカ人たちは絶えず監視されているという社会に生きている姿が描き出されていた。後者の映画作品の中では、日本においてはこうした監視はまだ行われていないようだが、アメリカのテクノロジーと通信ネットワークを持ってすれば、日本国民の通信を傍受することは容易いことであり、実際にそうしたことが過去に行われている。

実はアメリカ以上に強力な監視システムを持っているのが英国であり、ロンドンを舞台にした映画やドラマなどでよく出てくるTEMPORAというシステムがまさにそれである。前者のドキュメンタリー作品の中で、「ステラーウインド」というシステムについて言及があり、これはAT&TとNSAが組んで大量にデータを集める監視システムのことを指す。現代はこのように、国家諜報機関単体で監視システムを構築しているのではなく、国家機関と複数の通信・インターネット会社が共謀する形で一大監視システムを構築している。国と大企業との協働体制がまた厄介な点のように思えた。

ごく一部の権力を持つ者が権力を持たない大多数の者たちを監視し、縛るという構図が存在しており、それは拡大の一途を辿っている。私たちの日常の会話や行動が全て監視されているというの

は、本来自由であるはずの人間性を大いに毀損させている。スノーデン事件を取り上げたこの2つの作品は、プライバシーの問題や人権の問題を含め、現代社会における自由とは何か、人間の自由とは何かを考えさせてくれる非常に重要な作品だと言えるだろう。フローニンゲン:2020/11/23 (月)20:04

6429. 本日の計画と今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。いつもはこの時間帯はまだ静かなのだが、つい今し方救急車が走り抜けていく音が聞こえた。

天気予報を見ると、今日は1日を通して曇りがちのようだ。太陽は少しばかり姿を見せてくれるらしい。週末の予報気温が少し変わり、土曜日には最低気温が0度まで下がり、日曜日にはマイナス1度になるらしい。そこからは最低気温が0度近辺の日が続く。ようやく冬らしくなってきたことを素直に喜ぼう。

今日は午前中に1件ほどオンラインミーティングがあり、午後には街の中心部に買い物に出かけようと思う。コーヒー・お茶専門店で、オーガニックのコーヒー豆を2種類ほど購入する。その足で、オーガニックスーパーに立ち寄り、味噌、ゴマペースト、豆乳、椎茸などを購入する。オーガニックのヘンプオイルについては明日近所のスーパーで購入すればいいだろう。本日分はまだ残っているはずだ。

朝の闇の世界を眺めながら、今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、ある親友(NK)の実家がある山を車で走っていた。私は車の助手席に座っていて、誰か別の人が車を運転していた。しばらく車に乗っていると、私たちの車を追い越すほどに速い速度で走って来る女性の姿を見かけた。

その女性は私たちの車の横につけ、ふとこちらを見た。見ると、その方は、以前協働関係にあった会社の社員の方だった。私の方から2、3言葉をかけると、その方の走る速度は遅くなり、もう車からは見えなくなってしまった。気づくと私は車から降りていて、ゆっくりと歩きながら山道を登っていた。

山道をしばらく歩いていると、右の方に釜戸屋を見つけた。どうやら今その辺りでは、ある子供がやって来ることが噂になっていて、その子がどのような人物なのか私も関心があった。釜戸屋に入ると、そこでその子らしき男の子を見つけた。その子は壁に寄りかかりながら絵本を読んでいた。何の絵本を読んでいるのか話しかけようとしたところ、2人の女優が私に声をかけてきた。そしてまた1人別の若い女優が話に加わってきた。

最初に私に話しかけてきた女優は、私よりも少し年上であり、その後に話しかけてきた女優は私よりも歳が若かった。しばらく話をしていると、気がつけば私は野原に立っていた。そして、私の近くに先ほどまで話をしていた女優たちがいて、さらには私の友人たちもいた。

私たちは野原である遊びをしていた。野原の向こうに棒を立て、棒のてっぺんに風船のようなものを取り付け、棒の付近まで全員でサッカーのリフティングをしながらボールを落とさずに運んで行き、最後にボールをその風船のようなものにぶつけるという遊びだった。私たちは楽しみながらリフティングをしていき、棒の付近までやって来た。一応のルールとして、最後に風船にボールを当てる時にはヘディングで当てなければならず、それが意外と難しいことがわかった。何回か挑戦するも、誰もヘディングでボールを当てることができず、何かコツのようなものはないかとみんなで話し合い始めたところで夢から覚めた。フローニンゲン:2020/11/24(火)06:56

6430. 本日の映画鑑賞より

時刻は午後7時半を迎えた。辺りは深い闇と静寂さに包まれている。

今、フィンランドの作曲家のピアノ曲のオムニバスを聴いている。今日は結局ほとんど雲に覆われた1日だった。気温も低く、予定していた買い物を明日に延ばすことにした。明日はどうやら晴れるようなので、午後に街の中心部に買い物に出かけ、その足で近所のスーパーに立ち寄ろうと思う。

今日は昼前に1件ほどオンラインミーティングがあったが、それ以外の時間は映画を鑑賞するか、作曲をするかに時間を充てていた。そうしたこともあり、映画に関しては気がつけば6本ほど見ていた。アメリカ史上最大の黒人奴隷反乱を率いたナット・ターナーを描いた『バース・オブ・ネイション (2016)』、未開の地・北海道開拓の苦難を描いた『北の零年 (2004)』、アメリカ大統領選の裏側を暴くサスペンス映画『スーパー・チューズデー正義を売った日 (2011)』、次世代エネルギーという社会

問題を背景に男の人生の転機を描いた『プロミスト・ランド(2012)』、世界規格となったVHSビデオの開発秘話を映画化した『陽はまた昇る(2002)』などは政治や社会、そして経済・経営に関する映画である。

先ほど見終えたのは、『四日間の奇蹟(2005)』という作品であり、この作品の舞台は実際に足を運んだことのある山口県の角島(つのしま)であり、とても懐かしい気持ちで作品を見ていた。心が肉体を離れ、別の肉体に乗り移ることも確かにあるのではないかということを考えながら、同時に心とは何か、意識とは何かを考えさせてくれる素晴らしい作品でもあった。作品中のショパンやベートーヴェンの曲は美しく、ピアノ曲の持つ癒しの力を改めて思う。

映画を日々見ていくことによって、内側の世界が広がり、感覚もまた変化していることに気づく。内的世界の拡張と感覚の変容は、眼に見えるようなわかりやすい形として現れては来ていないが、確かにそうした変化が起こっていることは自分でわかる。

明日もまたオンラインミーティングが1件ほどあるが、少なくとも5本は映画を見れるだろう。明日に見ようと思っている作品はすでに何本が決めていて、それらを見るのが楽しみであり、同時に、思わぬ形で出会う作品を見ていくこともまた楽しみだ。見ることを決めていた作品を決定論的に見ること、そして非決定論的に可能世界に開かれた形で映画を見ていくことが、運命を深め、選択を広げていくことにつながるように思う。

昨日の就寝前にふと、音楽詩人としての自己認識が芽生えた。今日も詩のように短い曲を楽しみながら作っていった。音を用いて内的感覚を表現する詩人として日々を生きていくこと。それはもう決意ではなく、自分の人生そのものとなった。それは人生であり、同時に自分の役割でもある。明日もまた自らの役割を引き受けながら自分の人生を生きていく。フローニンゲン:2020/11/24(火)20:03

6431. 「動く絵画」としての映画/今朝方の夢

時刻は午前4時を迎えた。今朝は3時半あたりに目が覚め、そのまま起床することにした。目覚めがとても良く、もうそれ以上睡眠は必要ないと判断したからである。今の気温は4度であり、今日は8度まで気温が上がるそうだ。昨日は結局買い物に行くことができなかったもので、今日は午後に気分転換も兼ねて買い物に出かけたい。まずはコーヒー屋に行き、その後オーガニックスーパーに立ち寄

る。帰りがけに近所のスーパーを梯子する形で帰ってこようと思う。今日は午前中に1件ほどオンラインミーティングがあるが、それ以外の時間は昨日と同様に、作曲実践と映画鑑賞に充てていこう。

昨日ふと、映画を「動く絵画」として眺める感覚が芽生えていることに気づいた。端的には、映像美を楽しむという視点が加わったのである。自分が見たことのない景色や風景を堪能できる楽しみ。生涯において足を踏み入れることができないであろう世界の景色や風景、さらには未来の想像世界の景色や風景を楽しむこともできる。映画にはそのような魅力もある。

映画で流れる音楽もまた印象的なものが多く、映画は目と耳の双方を大いに楽しませてくれる。目と耳から刺激される感覚が多いことを考えてみると、映画は実に多くの刺激をもたらしてくれることがわかる。家にいながらにして、どこか未知の世界に冒険に出かけているような感覚をもたらしてくれることも映画の良さである。

今朝方は起床前に印象的な夢を見ていた。私は塾のような建物の中において、その2階で台湾人や中国人の女性と会話をしていた。2人とも背丈が大きくなく、1人の女性は私よりも少し若いぐらいであったが、もう1人は随分と若いようであった。2人は随分と流暢な日本語を話すことができ、2人と会話をする前に、私が忙しく仕事をしていることが気になっていたようだった。確かに、会話の直前まで仕事に没頭していて、会話の最中においても仕事を引きずっているような感覚があった。その点に関して2人謝り、そこからは会話を楽しんだ。

会話が終わると、私たちはその部屋から出ていくことにした。ちょっとトイレに立ち寄りたかったので、部屋を出て左手にあるトイレに入った。トイレの扉を開けると、そこには汚物で汚れた便器があった。便器には綺麗なカバーがかけられていたのだが、それも汚物で汚れていた。直感的に、小さな子供がトイレを汚してしまったのだと思った。私は自分の体に汚物が付着しないように、慎重に用を足し始めた。

ゆっくりと用を足していることもあって、辺りを観察する時間があり、タオルの方を見ると、そこにも汚物が付着していた。正直なところ、とても気持ち悪い感覚が私の中にあり、ゆっくりと用を足しながらも早く外に出たいと思った。しかしながら、十分に水分補給をしていたためか、やたらと用が長い。それを心配してか、友人が扉のガラス越しに声を掛けてきた。

彼もまたトイレに入りたいらしかったが、私はトイレが汚れていることは伝えず、用を足すことに集中した。一向に用を足し終える気配がなかったことに痺れを切らしてか、友人は強引にトイレの中に入って来た。すると友人は、すぐに汚物の存在に気づき、ギョッとしたような表情を浮かべた。

私は扉のガラスに背を向けて用を足していて、彼は外側の窓に背を向ける形で用を足し始めた。私たちは対面で用を足しながら、そこでもまた会話をしていた。今朝方はそのような夢を見ていた。汚物に関するシーンはとても印象に残っている。夢の中で汚物を見るというのは何を象徴しているのだろうか？汚物を掃除する気持ちは全くなく、むしろ誰かがそれをやるであろうから気にしないような振りをしている自分がいたことは間違いない。

仮に汚物が自分のシャドーを表しているとしたら、今の自分にはまだ自分で向き合いたくないシャドーがあり、それを見ることを他人任せにしているということだろうか。はたまた、自分で取り組みたくない仕事が現実世界の中にあって、それを他人に任せたいということを示唆しているのだろうか。どちらも可能性としてはなくはない。また、その他の可能性もあるかもしれない。フローニンゲン：

2020/11/25(水)04:23

6432. 穏やかな夕日を眺めながら

時刻は午後3時を迎えた。今、とても柔らかな夕日がフローニンゲン上空に浮かんでいる。

つい先ほど買い物から帰って来た。まず街の中心部にあるコーヒー屋に立ち寄り、オーガニックのコーヒー豆を2種類ほど購入した。1つはまだ試したことのない豆の種類であり、毎回少しずつ新しい豆を試して、色々と開拓を進めている。

ジョギングを兼ねてコーヒー屋に向かったのだが、気温はめっきり低くなっていて、走っても汗が出ることはもはやなかった。今週末からは寒さの1つ次元が1つ変わる。ギアが1つ変わったかのように、冬が深まっていく。

コーヒー屋に訪れた後には、街の中心部のオーガニックスーパーであるEkoplazaを訪れた。店に入ると、気さくな店員のメイが声を掛けてくれた。今日は残念ながら椎茸がなかったので、代わりにマッシュルームを購入した。このように、時折食材を変えてみることも大事かと思う。いつもオーガ

ニックのジャガイモは近所のスーパーで購入することにしており、結局今日は近所のスーパーに立ち寄ることをせず、明日にしようと思ったので、その代わりにサツマイモを1本ほど購入した。

以前はサツマイモを毎日食べていたが、このところはお無沙汰であり、久しぶりに蒸したサツマイモを今夜は味わおう。その他には、予定通りに、有機玄米味噌、有機豆乳、オーガニックのゴマペーストを購入した。

自宅に戻ってくる道はいつもと同じ道だったのだが、夕日を眺めながら石畳の道を歩いているとふと、目の前の景色が新鮮に見えた。そして、なんとも言えない詩情のようなものが湧き上がり、その感情が感謝の念に変わっていった。日常の景色が新鮮に見えたのは、そもそも世界が季節の進行と共に変化しているということもあるだろうが、ここ最近映画を毎日数多く見ることによって、世界を見る目が変わっていつていることもあるだろう。

映画は、日常を新たな目で見られることを促してくれるきっかけの役目を果たしてくれている。日々幸福感を感じられることと、日々変化を感じられることは密接に関係しているように思え、映画によって認識の枠組みが揺さぶられ、それによって日常が新たに見えるというのであれば、映画は変化を捉えさせてくれる力を私たちに授けてくれる点において、幸福の触媒とも言えるかもしれない。

そのようなことを考えながら歩いていると、いつの間にか自宅の近辺まで戻って来ていた。すると、自転車に乗った少しばかり年配の女性が家の前で止まり、私がふと振り返ると、笑顔で挨拶をして来てくれた。オランダでは見ず知らずの他人であっても、目が合えば挨拶を交わすことが多い。その年配の女性の笑顔が印象的であり、挨拶を交わせたことが、少しばかり自分の心を温めてくれた。

自宅に戻って3階の自分の部屋に向かっている最中に、上の階に住むイエルに遭遇した。イエルはインターン先の職場の人と電話をしている最中のようにあり、簡単に挨拶だけしようと思ったが、ちょうど電話が終わったようだったので、そこで少し立ち話をした。イエルは隣町のフリースランドからやって来て、フローニンゲンにあるマーケティングの会社で職を得るために数ヶ月前からインターンをしている。このようなご時世であるから、なかなか職を得ることも厳しいらしいが、なんとかインター

ンをこなし、近々職を得られるかどうかの報告があるようだ。イエルはとても好青年のため、彼には無事に仕事を得て欲しいと思う。

今、穏やかな夕日を眺めながら、平穏な満ち引きを繰り返す心の波の動きを感じている。フローニンゲン:2020/11/25(水)15:27

6433. 泡沫の如し宝のような流れとしての人生

時刻は午後8時を迎えようとしている。今、フィンランドの作曲家たちのピアノ曲が収められたオムニバス楽曲を聴いている。いずれの音色もとても心に沁み渡る。北欧に近いこの街で暮らしていることが、その感動をより豊かなものにしてきているのだろうか。

今から数時間前に、赤紫色の素晴らしい夕暮れ空を見た。あの赤紫色をなんと表現したらいいだろうか。そして、それが移りゆくあの姿をなんと表現したらいいだろうか。夕暮れ空もまた1つの生命のように呼吸をし、生きているのである。あのように美しく輝く夕暮れ空は、この季節の特権的な光景であり、自然からの大切な贈り物である。そうした贈り物を享受していた瞬間瞬間もまたこの人生における贈り物なのだ。

桜。もう9年も桜を見ていない。そのようなことをふと思った。

先ほど、昨日見た『北の零年』と今朝方に見た『北のカナリアたち』に続く「北の三部作」最終章を飾る『北の桜守(2017)』という映画を見た。満月の下に咲き誇る桜のなんと美しいことか。果たして自分はそのように美しい桜を再び見るができるのだろうか。もう2度と見れないかもしれない。仮に見れたとしても、それは残りの人生においてあと1、2回ほどなのではないかと思う。自分はもう桜の咲いていない土地で生きていくことを宿命づけられているのだと思う。だが、心の中では常に桜が自分の中にある。しかも、いつでも満開に咲いた桜を見ることができるのだ。

現在第3期を迎えた「一瞬一生の会」のある参加者の方が、リフレクションジャーナルの中で『グレートブルー(1988)』という作品について言及していた。今朝は真っ先にその作品を見た。この作品は、愛と友情、そして叙情に満ちた素晴らしい作品だった。見事な映像美から物語が始まり、音楽も洒落ていて、全体を通して透明感のある作品だった。イルカとの触れ合いや戯れのシーンは大い

に心が癒され、フランス人の主人公のジャックとイタリア人のエンゾとの間で育まれていた友情には思わず胸が熱くなった。

今日は午前中に2時間弱のオンラインミーティングがあり、午後には小一時間ほど買い物に出かけていたのだが、それでも映画は6本ほど見る事ができた。明日は特に何も予定がないので、大いに映画鑑賞をし、大いに作曲実践に励んでいこう。映画鑑賞によって涵養された自己は作曲にも肯定的な影響を与えている。

今日も感謝の念を持って1日を終えることができる。何か大きな変化や刺激に満ちた毎日ではないが、小さな変化と小さな刺激に満たされた日々を過ごしている。こうした日々を積み重ねていくのが自分の人生である。

一步一步の積み重ね。積み重ねていく塵が山にならなくても、自分は人生最後の日であっても塵を積み重ねる。それが自分の人生であり、自分の生き方である。

日々は宝のような塵なのかもしれない。日々は塵であり、宝であるし、宝であり、塵なのだ。

日々は泡沫の如し宝のような流れなのだ。今流れているピアノ曲のメロディーは、泡沫の如し宝の流れとして流れていく。日々の一瞬一瞬の時間は、そうした泡沫の如し宝のメロディーだったのだ。そして人生という総体もまたそうしたメロディーなのだ。

自分の人生に固有のメロディーが自分の元から離れていくとき、それはきっと誰かの人生のメロディーになる。人間は太古からそのように生きてきて、今もそのように生きているのではないだろうか。少なくとも、自分の中には過去に生きてきた人々のメロディーが脈々と流れ続けている。フロー
ニンゲン:2020/11/25(水)20:16

6434. 流れる時間/意識の流れの形象化

時刻は午前6時半を迎えた。今、小鳥たちの鳴き声が聞こえて来ている。ちょうど朝の換気のため、書斎と寝室の窓を開けていて、そこから彼らの鳴き声が聞こえてくる。今週もいつの間にかもう木曜日になっていて、あと少しで週末を迎える。本当に時の流れは早い。時間の進行過程において時

の早さを感じるわけではないのだが、振り返ってみたときに、いつの間にか時間が随分と過ぎていたという感覚なのである。これは良い兆候かもしれない。

日頃の活動中においては、活動そのものに没頭できていて、時間感覚など消失しており、活動を終えてふとしたときに振り返ってみると、随分と時間が経っていたという感覚なのだ。人生全体においてもそのような形で時間が進行していて、このままこうしたあり方を継続していけば、人生を終える段階になって初めて、随分と時間が経っていたことに気づくかもしれない。人生の瞬間瞬間に没入しながら、時間と共に歩いていき、振り返ってみたときに、時間の流れの早さとそこまで積み重ねて来たものを知る。そこに向かう形でこれからも日々を生きていこうと思う。

今日の最低気温は1度まで下がるようだが、最高気温は10度と比較的温かい。明後日の土曜日にはついに最低気温が0度となり、日曜日にはマイナス1度となる。しかも日曜日には最高気温がもう4度までしか上がらなくなってしまう。いよいよ冬本番といったところである。

昨日は結局、近所のスーパーに行くことができなかったのもので、今日の午後に散歩がてらスーパーに行こう。トイレトペーパー、そして果物と野菜を購入しようと思う。今日は特にオンラインミーティングもなく、全ての時間を自由に使える。午後にでも、この秋に一時帰国した際に作ったインテグラル理論に関する動画コンテンツのテロップのレビューをしたいと思う。

ちょうど昨夜に協働者の方からテロップ原稿が送られて来たので、そのレビューを行う。少し前に最初のレビューを行い、今回が最後のレビューとなる。本日やることはそれぐらいであるから、あとは映画鑑賞と作曲実践に全ての時間を充てていく。昨日はオンラインミーティングがあり、街の中心部に買い物に出かけたこともあり、3時間ぐらいそれらの活動に時間を充てていたため、映画は6本ほどしか見れなかったが、今日は7本ぐらい見れるかもしれない。

旧ソヴィエトの映画監督タルコフスキーが『鏡』という映画作品を通じて、意識の流れを映像化していったのと同じように、意識の流れを言葉・音・絵として日々表現していこうという意思を改めて持った。それを続けていくことによって、意識はどのように純化していくのだろうか、また、意識はどのように拡張していくのだろうかということに関心が向かう。その結果として、意識の流れは大河と合一で

きるのだろうかという関心もある。意識の流れを自分なりの表現手段で形にしていくことを今日も行っていく。今ここで書いた日記もまさにその実践の1つだ。フローニンゲン:2020/11/26(木)06:48

6435. 今朝方の夢

時刻はゆっくりと午前7時に近づいている。小鳥たちの鳴き声は止み、今静寂に包まれた闇の世界が外に広がっている。日の出は午前8時頃になり、日が昇る姿を拝むまでにまだ時間がある。

小鳥の鳴き声が止んだと思ったら、今また彼らの鳴き声が聞こえ始めた。それはいつも私の心を落ち着かせてくれ、なんとも言えない至福さに導いてくれる。彼らに祝福されながら、今朝方の夢について振り返りたい。今朝方の夢は、幾分自分の攻撃性が現れるような内容だった。

夢の中で私は、見知らぬ体育館のような場所にいた。そのフロアはよく磨かれていて、とても綺麗だった。私は体育館の右端の方において、フロア全体を見渡すと、小中学校時代の友人たちが多くいた。どうやら私たちはこれから体育館で運動をするらしく、今は準備体操の時間のようだった。

フロアの前の方には、中学時代にお世話になっていた若い女性の数学の先生がいた。先生はどういうわけか私に右手だけの腕立て伏せを命じた。私もそれに挑戦したいと思ったので、すぐに腕立て伏せを始めたところ、それが一向に終わらない。最初は自分の腕立て伏せのどこが悪いのかわからず、なぜ長く腕立て伏せをさせられるのかイマイチ理解できなかったが、どうやら右足の親指のポジションがあまり良くないことに自分で気づいた。しかし私は、そのポジションを修正することなく、少しばかりムキになって、そのまま腕立て伏せを続けていた。

自分であれば永遠と腕立て伏せを続けていけるという確信があったのでそのような態度を取った。すると、先生が注意のためか、私のところに近づいて来た。そして、先生が私の真ん前にやって来たところで、私は突然腕立て伏せをやめ、先生に殴りかかった。先生はフロアに倒れ込み、それを見て、今度は腹部に蹴りを何度も入れ、最終的には殴り殺す結果になった。先生の死亡を確認し、私は何食わぬ顔で友人に声を掛けて、体育館から出て外にでも行こうと述べた。そこで夢の場面が変わった。そう言えば、この夢の場面の前に、小中学校時代の友人(ST)と一緒に街をランニングしていた場面があった。彼は野球部のキャプテンを務めていて、彼に野球部の近況について話を聞きながら走っていた。

野球部には個性的な人間が多かったので、取りまとめるのは一苦労だと言うことを彼は述べていて、私もそのように思った。するといつの間にか彼はどこかに消えていて、彼は若くして亡くなったという知らせがどこからともなくやって来た。そのような夢の場面があった。

最後の夢の場面では、私は焼肉屋の前にいた。私自身は肉は一切食べないのだが、2人の友人が焼肉屋に行きたいと言ったので、彼らについていくことになった。友人のうちの1人は、小中高時代の親友(SI)であり、彼が店の予約をしてくれていた。店に入ると、店員は誰もおらず、客の姿も見えなかった。

どうやら食事をする場所は2階よりも上の階のようだった。すると、どこからともなく店員の声が聞こえて来た。天井に備え付けられているスピーカーから女性の店員の声が聞こえて来て、予約番号を教えてくださいと述べた。友人は予約番号を伝え、私たちは上の階に通された。

上の階に向かうまでの途中の階段が変わっていて、階段は捻り曲がっていて、柵もなく、階段から落ちると大怪我をしそうな感じであった。不思議な階段をゆっくりと登っていると、いつの間にか私は、学校の教室の中にいた。そこは小学校の理科室のようだった。理科室は中庭に面していて、紫陽花のような花が咲いていた。私の席は、中庭の見れる窓際の一番前の席だった。自分の席に向かってみると、机が自分のものではないことに気づいた。

すると、友人である双子の兄弟の弟の方が、私の机を後ろにどかし、彼の机が本来の自分の席のある場所に置かれていたのである。彼は自分の席に座ろうとしていて、それを見て私は、もう一度自分の机を本来の場所に持ってこようとした。まず彼の机を強引に後ろにどかし、彼の手荷物も脇に置こうと思った。彼の食べ物が入った容器がビニール袋の中に仕舞われていて、ビニールの中で私は容器を潰し、持ち物ごと全部窓の外に捨てた。

彼は私のそのような行為に怒り始めたが、私も自分の席が奪われたことに対して腹を立てていたので、そこで喧嘩になるかと思ったが、私には敵わないと思ったのか、彼はその場から消えた。今朝方はそのような夢を見ていた。いずれの夢も印象的であり、シンボルとして色々と示唆に富む。お世話になった教師を殴る夢を見るというのは久しぶりだったように思う。ここ最近の映画鑑賞にせよ、創作活動にせよ、自分の内側にある巨大なエネルギーがそれらの活動に自分を駆り立てている側

面は確かに存在しており、そうした意味において、怒りにまつわるシャドーは自分の活動の根源でもある。

怒りという感情にも発達段階があり、夢の中の怒りは往々にして低次元の“anger”のようなものだが、現実世界においてはそれがこの時代のあり様への嘆きにつながっているような“indignation”として現れているように思う。この感情が自分の日々の活動をどこか根元から支えていて、強く活動を駆動させている。

夢の中で自分の手によって殴られたり、殺されたりする対象は様々だが、共通しているのは過去にお世話になった人たちであり、そして彼らは権威があるということである。今回の夢は、「師匠殺し」ということが1つ主題になっているように思われ、師匠を乗り越えていくことが夢の中で起きていることは興味深い。夢で発露された攻撃性が一度落ち着き、純化される形で今の自分の内側に流れているように感じる。このエネルギーをもとに、今日もまた自分の取り組みに従事していこうと思う。フ
ローニンゲン:2020/11/26(木)07:24

6436. 『congress未来学会議(2013)』を見て/今朝方の夢の続き

時刻は午後7時半を迎えた。今日は1日中曇っていたが、それでも充実感を感じさせてくれる1日だった。見たうちに入らないぐらいの微々たる投入量だが、今日も映画とドキュメンタリーを合わせて6本見た。昨日の予定だと、今日は7本ほど見ようと思っていたが、現在進行中の「一瞬一生の会」の音声ファイルを作成していた。

最近では必然的に映画の話が多くしており、今日録音したものも映画の話しか今のところしていない。就寝前に音声ファイルを作成してしまうと、意識が覚醒してしまうので、できれば寝る前に録音するのは避けたいが、夕方に録音したものだけでは話し足りないように感じるので、この日記を書き終えたらまた録音をしたい。

今日見た作品では、ビルマ民主化運動を牽引したアウンサンスーチー氏の半生を描いた『The Lady アウンサンスーチー ひき裂かれた愛(2011)』という映画、第45代アメリカ大統領、ドナルド・J・トランプの半生を綴るドキュメンタリー『波乱万丈！トランプ大統領の知られざる人生(2014)』、プラシーボ効果を取り上げ、人間の治癒力の不思議に迫った『プラシーボ ニセ薬のホントの話(2014)』

というドキュメンタリーは、いずれも興味深かった。それらについてはこれから音声ファイルを通じてコメントをしておきたいと思う。

本日見た映画の中で最も面白かったのは、『コンgress未来学会議(2013)』という作品である。この作品はある意味、マトリックスを超えた映画だった。なぜなら私たちの社会が実際にこのような社会が作られる方向に動いており、実際に部分的にもうこうした社会が到来しているからである。そして、いずれ本格的にこうした社会がやってくるのが明らかになって来ているからである。

幻覚の世界で幻覚の人生を歩む人々の姿。現代においては、列車の中や街中で、あるいは至る所でスマホを片手にネット的ヴァーチャル世界にプラグインし、その世界に無自覚に浸っている人たちが大勢いる。今後はテクノロジーの進歩によって、その度合いが一層強まり、人々はヴァーチャルの世界かドラッグによる幻覚世界に浸る時間が長くなるだろう。そして、ずっとそうした世界に留まり続ける人たちが増えてくるはずである。なぜならそれらの世界では、現実世界の苦しみから逃れることができ、幸福感も感じられてしまうからである。また、映画の中で描かれていた空中庭園のように、クスリでエゴから解放され、争いのない平穏な世界の中で生きられるからである。

この映画作品は、インテグラル理論で言うところの第2層の世界観を体現していなければ理解が難しい映画かもしれない。あるいは、トランスパーソナル的体験をしたことがあるか、そうした知覚体験に関する知識がなければ理解できない部分が多々あるだろう。そのようなことを思いながら、映画はイマジネーションの産物であり、未来の人間のあり方や社会のあり方を見事に描写していることがある点についても考えていた。1人の人間のイマジネーションが集合のイマジネーションに浸透し、それが具現化されていく。そのイマジネーションが否定的・肯定的なものかにかかわらず、人間のイマジネーションの力にはそうした力があり、映画というのはそうした装置のように思えてくる。

時刻はもう間もなく午後8時を迎えようとしている。この時間帯になって、そう言えば、今朝方の夢の中で、シュークリームを食べようとする場面があったことを思い出す。私は、小中学校時代を過ごした社宅の食卓に座っていて、朝食を食べようとしていた。母がシュークリームを含め、甘いお菓子を冷蔵庫に保存していたことを私は知っていて、朝食としてそれらのいくつかを食べたいと思っていた。しかし、母はそれらをどうやらどこかにお土産として持っていくために保存しているようだった。またそもそも私は朝食を普段食べないこともあり、結局それらのスイーツを食べないことにした。

そのような夢の場面があったことを今になって思い出す。今夜はどのような夢を見るだろうか。

ローニンゲン:2020/11/26(木)19:56

6437. 今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えようとしている。今朝は午前4時半前に起床した。目覚めはとても良く、今日1日が充実したものになるであろうことを起床時に確信した。このくらいの時間に起床することができれば、今日も思う存分に映画鑑賞をし、作曲実践ができる。

良い映画は、その時代の世相を映し、その時代に固有の人間の有り様や社会を映し出す。また、それと対照的に、その作品の傑作性が高まると、人間や社会の普遍的な側面も映し出す。今日もそうした条件を満たす良い作品と出会えると期待する。

映画鑑賞と作曲実践に加えて、今日は午後にも、インテグラル理論に関する動画コンテンツのテロップ原稿のレビューをしたい。これは昨日に行う予定だったが、昨日は「一瞬一生の会」の音声ファイルを2時間分作っていたこともあり、レビューの時間を取ることができなかった。今日の午後にレビューを完了し、夜に協働者の方にレビューの完了の旨を連絡する。

まだ5時を迎えていないためか、小鳥たちの鳴き声が聞こえてこない。今日は午前中に少し小雨が降るようだ。今改めて天気予報を確認すると、なんと明日の最低気温はマイナス2度、明後日の最低気温はマイナス3度と表示されている。昨日に予報を確認した時よりも気温が下がっている。もう冬本番である。

今朝方も少しばかり印象的な夢を見ていた。夢の中で私は、小中学校時代の友人(MS)の運転する車の中にいた。私たちは高速道路を使ってどこかに向かっていた。

友人の運転はとても荒く、かつ時速180kmから200kmをコンスタントに出していて、スピードを出し過ぎる運転だった。そのくらいの時速になると、ハンドルを少し切るだけでかなり曲がってしまい、その高速道路はかなりカーブが多かったので、ハンドルを切り返しながらい進んでいく様子はとても冷や冷やしていた。実際のところ、ガードレールに何度もぶつかりそうになるが、なんとかぶつからずに進んで行った。あるところで、ガードレールについてぶつかってしまうかと思ったら、左手に別の道

が見え、そこに白銀色の軽自動車が止まっているのが見えた。どうやらそれは知人の車のようだった。

その車は誰かの家の前で止まっていて、私たちの車もそっちに向かってゆっくり動いて行った。すると、その軽自動車が突然バックで坂道を下ってきた。厳密には、パーキングモードから運転モードに切り替えた際に、後ろに下がってきてしまったのである。私たちはそれに驚き、私たちの車にぶつからないように、私たちも後ろに下がった。なんとかぶつからずに済んだところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は空き地にいた。空き地の柵の前には一軒家が立っていた。私はズボンを履いている最中であり、見ると下着を履いていなかったのだから、同時に下着も履こうとしている最中だった。ズボンに足を通しながら、同時に下着にも足を通すことをしていると、私の目の前に見知らぬ女性が現れた。その女性は、どうやら私の先生のような女性だった。

私の近くには友人を含め、何名かの人々がいた。その中には見知らぬ人もいた。下着とズボンを履きながら、隣の男性の靴を見ると、スウェードのシューズを履いていて、それがとてもお洒落に見えた。私もスウェードのシューズが好きであり、自分も似たようなシューズを持っていることを告げると、その男性は嬉しそうにしていた。次回は自分もスウェードのシューズをお揃いとして履いてくる旨を冗談めかして言うと、その男性は笑った。

そのようなやり取りをしながらも、一向にズボンと下着を履き終える気配はなく、同時にそれらを履こうとするから手間取るのだと思った。すると、先生のような女性に命じられ、私だけ草むしりをさせられることになった。その女性は別に怒っているわけではないのだが、何かの罰を私は受けているようだった。その他の人たちは空き地で運動をすることになった。

どうして私だけが草むしりしないといけないのか納得できずにいると、その女性は私に声をかけてきて、「本当はこうした罰を与えることはいけないことなんです…」と述べてきた。おそらく学校では、こうした罰を生徒に与えることは禁止されているのだと思った。であればなぜ自分にそのような罰を与えるのか納得できず、草むしりなど無視して、私もみんなと運動をしようと思ったが、先生にも何かしらの思いがあるのだと思い、「草むしりは本来ボランティアでやればいいんじゃないでしょうか？ 生

徒の自主性を尊重することが大切だと思うんです。なので僕はこれからみんなと運動をしますが、自主的に残って、あるいは隙間時間や休憩時間に草むしりをしますよ」と述べた。すると、その先生らしき女性は涙を流し、嬉しそうな表情を浮かべた。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2020/11/27(金)05:12

6438. 『バニラ・スカイ (2001) 』 『666号室 (1982) 』を見て

時刻は午後7時半を迎えた。今、今日という1日がゆっくりと終わりに近づいている。今朝は4時半前に起床し、そこから今に至るまで、映画やドキュメンタリーを合計で8本ほど見た。今日の映像作品鑑賞からも随分と多くのことを学んだ。その中でも、午前中に見ていた『バニラ・スカイ(2001)』という作品はとても印象に残っている。昨日見た『 कांग्रेस未来学会議(2013) 』と同様に大変素晴らしい作品だった。

精神錯乱者の内面世界を理解する意味でも、明晰夢の世界を理解する意味でも非常に示唆に富む作品だった。私たちは日常、様々なリアリティを否応なく生きているのだが、さてどれが本当のリアリティなのかという問いを突きつけられるが、いずれも部分的にリアル性を内包しており、ある特定のリアリティだけがリアルだと思ってしまう、それ以外を排除してしまうことの危険性を思う。同時に、複数のリアリティが存在しているということと、そうした多様なリアリティの中を生きているという自覚がないと、錯綜するリアリティの中で迷子となり、作品中の主人公のように精神が錯乱してしまうこともあるだろう。

作品中の“LF (Life Extension)”という会社とそこで提供されているサービスが興味深い。特に、肉体を冷凍保存し、明晰夢を見るサービスが印象的である。それを利用すれば、一死死ぬことなく、自分が見たい夢だけを見て生きることができる。現代社会の動きを観察してみると、これは本当に近い将来実現可能なサービスかと思う。実際にオランダでは、明晰夢を見ることのできるアフリカの植物の茶葉がドラッグショップで売られていて、それと肉体の冷凍技術を組み合わせればそうしたサービスが提供できるだろう。そうした具体的な話ではなくとも、見たいものだけを見て生きることを促す社会というのはもう到来しているように思える。まさに現代人の多くは、SNSやメディアにおいて、自分の見たいものだけしか見なくなっているのだから。

今日は『ザ・スコープ<90年代> Part1』や『ザ・スコープ<90年代> Part2』などのドキュメンタリーに加え、『666号室(1982)』というドキュメンタリーを見た。この作品を見ながら、「映画哲学」「映画美学」というキーワードが自分の中から自発的に浮かんで来て、そうしたジャンルがあるかを近いうちに調べてみよう。それらもまた自分の新たな探究領域にしていく。

このドキュメンタリーは今からもう40年前に作られたものだが、その中で語られていることは現代にも当てはまることが多分にある。例えば、映画の世界においても商業主義が横行し、多様性のある作品が減り、小作がどんどんと作られなくなってしまっている現状だ。こうした状況は、映画産業という生態系を崩壊させてしまう危険性がある。自然界の生態系と同様に、生態系の維持と発達のためには多様性が必要なのだ。大衆受けする売れる映画しか世の中に出せないという状況には本当に危惧する。

インテグラル理論の観点を用いれば、「芸術としての映画」は人々の意識や時代精神を扱う点において左上象限と左下象限に対応し、「産業としての映画」はもっぱらカネに着目する点で右下象限に対応すると言えるだろう。そのようなことを考えながら、「映画は見えないものまで見せることができる。それが映画の素晴らしさだ」というある映画監督の言葉が印象に残っている。

明日は午前中に1件ほどオンラインセミナーに登壇することになっているが、それ以外の時間は本日より積極的に映画やドキュメンタリーを見ていこうと思う。ここからより一層映像作品から学びを得ていこうと思う。フローニンゲン:2020/11/27(金)20:01

6439. 今日の予定と今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。昨夜、1日を振り返る日記の中で、昨日ははっきり土曜日だと思っていたのだが、今日が土曜日だった。昨日はまだ金曜日であり、まるで土曜日のような感覚で過ごしていたのでそうした誤解があったのだと思う。街の雰囲気も休日のような落ち着きがあり、昨日は映画やドキュメンタリーを合計で8本ほど見ていたこともあって、土曜日のように思ってしまったのかもしれない。

今日は、午前中にオンラインセミナーに登壇することになっている。日本ファシリテーション協会さんからお声掛けいただき、成人発達理論とファシリテーションを絡めたセミナーに登壇さえてもらうこ

とになった。今日はそのオンラインセミナー以外には特に仕事はなく、今日もまた映像作品の鑑賞と作曲実践を大いに進めていきたいと思う。

昨日、『バニラスカイ』の映画を見て、この作品に関して「一瞬一生の会」の音声ファイルを通じてコメントした。その際に、LSDについて言及し、今朝方少しばかり改めてLSDについて調べていた。LSDとは、スイスの化学者アルバート・ホフマン(1906-2008)が、当時サンド社(現在のノバルティス)に勤めていた際に、1938年に合成に成功した幻覚剤である。このLSDについてドキュメンタリーが2つあることを知った。1つは『L.S.D—プロブレムチャイルド&ワナードラッグ(2008)』というものであり、もう1つは“The Substance: Albert Hofmann’s LSD (2011)”というものだ。本日のどこかの時間帯にそのうちの1つを見て、明日にもう1つを見るか、時間があれば今日中にどちらも見ておきたいと思う。

それでは今朝方の夢について振り返り、早朝の活動を始めていきたい。夢の中で私は、実際に通っていた小学校の教室にいた。ちょうど給食前の最後の授業が行われていた。しかし教壇には先生はおらず、生徒たちが椅子に座って思い思いに会話をしていた。私は一番後ろの席に座っていて、教室全体を後ろから眺めながら静かにしていた。すると給食の時間となり、給食係がすぐに給食を運んでくれた。

給食が配られると、みんなで食べ始めるのかと思いきや、再び授業が始まるらしく、授業を聞きながら給食を食べることになっているようだった。先生が到着するまで、みんな給食には手をつけず、またしても思い思いに話しながら先生の到着を待っていた。

すると、先生が到着する前に、教室に遅れて入ってきた女子に「これもらってくね」と笑顔で言われ、牛乳とコーヒー牛乳、さらにはヨーグルトを取られてしまった。私はそれを別になんとも思わなく、「別にいいよ」とだけ述べた。もしそれらが必要になったら、給食置き場に余っているものをもらっていけばいいだけだと考えていたからである。

先生の到着はまだだったが、一応先に余っているものをもらいにいくかと思って、私は教室を離れた。すると、教室を出て右手にあるトイレで何か騒ぎがあったようだった。女子トイレで何か事件のよ

うなことがあったらしかった。それについて少し気になったが、私に関与することでもないかと思い、給食置き場に向かった。

階段を降りて、廊下を歩いていると、前方に、高校時代に漢文でお世話になっていた女性の先生がいることに気づいた。すると突然、私の体は宙に浮き、廊下を飛ぶ形で先生を追いかけ、先生に声をかけた。先生は私が空を飛んでいることを一瞬驚いたようだったが、その場で少しばかり会話をし、そこで別れた。気づくと私はもう給食置き場の前まで来ていた。

目当てのものをもっていこうとしたところ、後ろから声をかけられ、振り向くと、中学校時代の2学年下のバスケット部の後輩だった。後輩は笑顔でそこに立っており、彼曰く、私のあとを追ってきたとのことだった。彼は先生に咎められながらも教室から抜け出し、自分に会いに来てくれたようだった。それを嬉しく思い、2人でその場に余っている飲み物とヨーグルトをもっていくことにした。

そこで夢の場面が変わった。今日はその他にも、実際に通っていた中学校のグラウンドでサッカーと野球をする夢を見ていた。同じ学年の男子が2つに分かれて競い合う形でこれらのスポーツを行っていた。私は片方のチームでキャプテンのような役割を務めていて、誰を先発にするかを含めて、チームのマネジメントを行っていた。フローニンゲン:2020/11/28(土)07:00

6440. 仮眠中の知覚体験/9本の映像作品を見て

時刻は午後8時を迎えた。休日の1日がゆっくりと終わりに近づいている。

今夜はマイナス1度まで冷え込むようなので、そのつもりで暖かくして寝ようと思う。今ではもう湯たんぽを使うことが常態化していて、就寝前に腸と足先を温めて寝るようにしている。こうしたことも快眠につながっていて、さらには腸を温めることは免疫力の強化にもつながっているように思う。

今日は午後に仮眠を取っていると、深いコーザルの意識状態を体験した。仮眠から目覚めてみると、そこで深い治癒が行われている感覚があった。また、コーザルからサトルの意識状態に移行する過程の中で、幾分不思議な知覚体験をしていた。音を捉える感覚が変容しており、上の階に住む知人が扉を開ける音が、自分の部屋の扉を開ける音のように知覚され、音の距離感が通常とは

異なっていることに気付いた。その他にも、コーザルからサトルの意識状態に戻ってきた時には身体感覚が徐々に取り戻される感覚があった。

端的には、コーザルとサトルの境目の意識状態において、身体感覚が完全に消失していたのである。それは幽体離脱的な身体感覚と言ってもいいかもしれない。こうした体験は、時折仮眠を取っている最中に起こる。今後も同様の体験をした際には観察を行い、意識に関する洞察を深めていこう。

今日は午前中にオンラインセミナーに登壇したのだが、それでも日中には十分に自らの取り組みに従事することができ、この時間までに合計で9本ほどの映像作品を見た。これまでは8本ぐらいが限界かと思っていたが、9本でも問題なくそれらを消化・咀嚼することができるとうわかった。もちろん、1つ1つの映像作品から得られたものを真に咀嚼するには時間がかかる。だが今は、とにかく映像作品からの学びに対して飢えており、1日に9本見ても探究への飢えは対して満たされない。それどころか、さらにもっと作品を見ていきたいという飢えが強まるばかりであることが興味深い。

明日は特に何も予定がないので、本日と同じぐらいに作品を見ていきたいと思う。本日見たドキュメンタリーとしては、LSDを取り上げたもの、そしてティモシー・リアリーを取り上げたものが印象に残っている。それらについては、ちょうど今から「一瞬一生の会」の音声ファイルを作成しようと思っているので、そこで言語化しておこうと思う。リアリーに関するドキュメンタリーは随分と前に見ていて、今回で2回目だったが、意識や脳について色々と考えさせられることがあり、収穫が多かった。

映画で印象に残っているのは、クリント・イーストウッド監督の『ハドソン川の奇跡(2016)』という作品だ。これについても音声ファイルの中で話しておきたい。

何か1つここで書き留めておくものがあるとするならば、航空機の事故を取り上げるようなこうした映画であれば、事故の責任追及を最後まで行い、悪を特定したがるものだが、そうしたことはせずに、責任の所在をどこか1つに限定することを避け、悪は1つだと限定することを良しとしないイーストウッド監督の信条に共感した点である。

端的には、人間には誰も悪が住み着いており、そうした特性を考慮せずに、ある1人の人間だけを悪人に仕立て上げることをイーストウッド監督は嫌っているように思える。また、この世界は不条理

に満ちていて、不条理を乗り越えていくのではなく、不条理を引き受けながらいかに生きていくかを
イーストウッド監督は大切にしていることが他の作品からよく感じ、今回の作品においてはその点は
それほど強調されていなかったが、いずれにせよ、イーストウッド監督の作品からは、人間性とは何
か、社会の本質的な姿はどのようなものかを大いに考えさせられる。フローニンゲン:2020/11/28
(土)20:26